



Title	カーレン・ブリクセン「SORG-AGRE」：人間の条件
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 1974, 31, p. 67-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80520
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カーレン・ブリクセン

「SORG-AGRE」——人間の条件

岡 田 令 子

“SORROW ACRE”

Karen Blixen's Pursuit to Fulfill the Obligations of Life

Reiko Okada

Isak Dinesen-Karen Blixen (1885—1962) published her third works, *Winter's Tales*, during the World War II both in the United States and Denmark at the same time.

Among the eleven short stories in this book, SORROW ACRE is considered to be her masterpiece, as it expresses her philosophy of life on human conditions in its best form of art.

It is a story of a young Dane called Adam, coming home after a long period of absence, to meet his own past in the familiar surroundings, his uncle, a feudal lord, and one of his peasant women, who mowed the rye field and died in order to save her son's life. Through meeting them Adam came to understand the best way to fulfill the obligations of life and to find the unity and harmony in all creations of this universe.

This brief report will trace the contents of the story to present the inner world of the authoress with the writer's comments.

(1) *Vintereventyr* について :

“Sorg Agre” (Sorrow Acre—悲しみの土地) は、Karen Blixen (1885～1962) の第三の作品

集—*Vintereventyr* (Winter's Tales—冬の物語)—の中の一つであり、この中には全部で11編含まれているが、その10番目にある、約50頁の短編である。

この作品集は、処女作、*Syv fantastiske fortællinger* (1935) と *Den afrikanske farm* (1937) に続いて、1942年、すなわち、デンマークが、ドイツ軍に占領されていた第二次大戦中に出版された短編集である。当時、デンマークの人々は、誇りとする自由を奪われ、ただ暗い日々を耐えながら、戦争の終る日を待ち続けていたにちがいない。

“占領下では、退屈さと、うっとうしさで気が狂いそうになった……。”と作者 Karen Blixen も後日、或⁽¹⁾るインタビューの中でもらしている。

空襲や、戦闘という、生命の危険を日常生活の中に、直接感じる程、戦時下のデンマークの社会情勢は緊迫してはいなかったとはいえるものの、Blixen の家⁽²⁾の裏庭は、ドイツ軍の野営地になり、彼女は歯ぎしりをして、この屈辱に耐えたといわれている。当時、隣国のスウェーデンでは中立を守り得たが、デンマークとの間にはもはや、平和時のように自由に行き来も出来なくなっていた。しかし、この作品集を発表しようとして、彼女は、あえて首都ストックホルム行きを決行した。⁽³⁾ 先ず米国大使館に原稿の郵送を依頼したが断られ、やっと、英国大使館の好意で、ロンドンを経由して、ニューヨークへ届けられたという。このようにして、1942年には、英語版もデンマーク語版と同年世に出たが、英語版では、この本の題を *Winter's Tales* としてあり、作者が少女時代から親しんでいた Shakespeare の *The Winter's Tale* からヒントを得たと思われる。“A sad tale's best for winter” (*The Winter's Tale* II. 1. 25) を⁽⁴⁾ Langbaum は指摘している。

作品の題が示すように、この物語は、厳しい、占領時代の⁽⁵⁾“冬”を耐えて行かなければならない人々にとっての慰めの意味をも暗に含んでいたのであるが、彼等が当時、目前の出来事に心を奪われ、刻々と移り変る世界情勢に一喜一憂していた頃、それを超越したところの、人間の普遍的な生の姿というものを描き出して芸術に高めたものが、*Vintereventyr* だと言えるかも知れない。

作者は、この作品に対する英米の読者の反応を知るためには、戦後まで待たなければならなかった。

米国⁽⁶⁾では、*Winter's Tales* は、Army Forces Edition としても出版されており、戦場において兵士達が、この本から深い感銘を受けたということは、戦後すぐに赤十字を通じて作者に送られて来た兵士達の手紙によってわかった。なお、この作品集も、彼女の前の二つの作品と同じく、⁽⁷⁾ Book-of-the-month に選ばれた。

デンマーク国内にあっては、出版当時の批評は筆者の手元にはないが、処女作やアフリカの回顧録があまりにも国際色豊かな内容を持っていたこともあって、この作品によって始めて、Karen Blixen が⁽⁸⁾デンマークの作家であるという印象を読者に与えることが出来たとみられるものである。実際、多くのデンマークの読者が認めているように、この第三の作品には、デンマークに

関する題材がより多く盛り込まれていると共に、処女作に見られるような、新奇で大胆な、いわゆる *fantastisk* な要素もずっと少くなっており、落ち着いた内容を持っているから、我々読者は、この作品と処女作との間には、異った趣きを感じ取るのである。作者の研究者である Aage Henriksen は、この作品が、⁽⁹⁾ *strengt og dybsindigt komponeret* (厳格にそして又、深みを持って構成されている) といっているが、作者の題材の選び方、あるいは、彼女の関心が、外界のバライアティー、多様性を持ったものから、その奥にひそむ、究極的なもの、統一的なものへと向って行ったことは確かであろう。⁽¹⁰⁾ 彼女自身も、*Syv fantastiske fortællinger* を書いた時には、自分は絶望的であった、といっているが、その絶望感は、*Vintereventyr* には見られないばかりでなく、生きることに對する強い意志と確信を持っていることがうかがえる。

又、処女作にとられた作法、すなわち、作者の思考があちこちに隠され、直接的には見られなかったのに比較すると、第三のこの作品では、作者の思想が前面に押し出されており、ここで取り上げる “Sorg-Agre” (悲しみの土地) は⁽¹¹⁾ 多くの人々によって、彼女の最高作品とみなされているものであり、Karen Blixen の持つ、世界と人間に對する考え方が明確に提示されているのである。

(2) 作品が書かれたいきさつ：

この物語は、南ユラン (ユトランド半島) の伝説からヒントを得て書かれたもので、母が罪に問われた息子の身代りになって死ぬということを主題としたものである。この⁽¹²⁾ 伝説の物語は、初め、F. Orth によって⁽¹³⁾ *Udvalgte Sønderryske Folkesagn* (1919) の中で伝えられていたが、後になって同じく、デンマークの作家、Paul la Cour (1902—56) が、⁽¹⁴⁾ 1931年にこれに変化を持たせて書きかえた。Karen Blixen は、アフリカ滞在中この⁽¹⁵⁾ la Cour の書いた “Sorg-Agre” を読んでいたという。そして、新たに彼女が物語を書き改めたのは、アフリカから⁽¹⁶⁾ 帰国してからのことである。

又、この物語を書いた動機は、或る⁽¹⁷⁾ 友人に *arbejderkultur* (労働者文化) というようなものがあるのかどうか聞いたところ、その友人は、Karen Blixen に *herregaardskultur* (地主の文化) というものの存在を尋ねたので、その問に對して、一つの返答としてこの物語を書いたというが、動機はともあれ、この “Sorg-Agre” において、友人の問に對する答というよりは、作者の思考の世界を、一つの美しいまとまった芸術作品として完成することになるのである。

la Cour の作品では、物語の中心を⁽¹⁸⁾ 息子の母親の感情面に置きながら書かれているといわれるが、Karen Blixen は、先づ、物語の時代を伝説のそれよりも一世紀余りずらせて、⁽¹⁹⁾ 18世紀の後半に設定し、ある日、一つの出来事が起った莊園に、領主と、外国から帰って来た彼の甥を

登場させ、その甥の見た、一日の出来事を中心として物語を展開させるという手法をとっている。

18世紀に時代を設定したことについては、この時代の後半に至って、デンマークは専制政治の時代であったとはいふものの、⁽²⁹⁾ 土地改制などが行われ始め、旧時代思想が、新時代のそれとの出会いを見る時であったからだといえよう。しかし、全く新しく、Adam と呼ばれる領主の甥を登場させることによって、この旧新両時代の思想を代表する者として、一応二人を対比させながら、両時代のイデーの下に生きる二人の会話を通じて、人間の必然性の問題、さらには、この必然性を持つ人間が、如何に歴史の中で、その生を生き抜くかを探求しているといえるのである。

(3) “Sorg-Agre” について：

○ 自然

すでに“詩人”⁽²¹⁾ についての拙稿で指摘したように、Karen Blixen の物語には、しばしば、その冒頭に、後読する内容の全体を暗示する部分が置かれているが、“Sorg-Agre” の場合には、デンマークの風景描写から物語が始められている。自然描写は、この“Sorg-Agre”に限らず、Karen Blixen の作品全部を通じ、なくてはならない美しい要素の一つであるが、この“Sorg-Agre”にあっては、特に、彼女の自然の見方、受取り方、そして、描かれた自然が、人間をも包括したところの、超歴史的な世界、その永遠の姿を示唆するかのように、象徴的に書かれている。

日の出前の大地が神秘の内に目覚め、谷間のあちこちから朝もやが立ち昇り、涼しい大気の中に、木々の葉から朝露が滴り落ちている。その文体は荘重そのものであり、古典的で、創世紀の数ヶ所を思い出させるものがある。

Den vidtstrakte, bølgende danske Egn var blikstille og sval, forunderlig lysvaagen i den tidlige Morgentime, inden Solopgang. Der var ikke en Sky paa den perlegraa Himmel, ikke en Skygge langs de dæmrende Højdedrag, Skove og Marker.

Taaen var ved at lette fra Lavninger og Dale, Luften var kølig, Græs og Løv drivvaade af Dug.
(s. 269)

この自然は、人間と対決、あるいは分離してあるものではなく、人間をも包みこみ、その中に人間を形成し、育んできたものであり、人間と共存し、調和と平和の、幸福な関係を保ってきたものである。大地に最も近く、それにこびりついているように見られる農家、ピラミッド型に刈り込まれた並木道をもつ立派な領主の家、それらは共に、大地に根を下しているものであり、その大地の上に立って、ずっと昔から周囲の動物や植物と生存を共にして、今日まで在り続けて来たのである。

人間も、この自然の中で生まれ、その営みを続け、そして、死んで行ったのである。ここではもはや、個々の人間が、何時生れ、又、死んだかは問題ではない。領主の家では、貴品と威厳のある生命が、家名と共に受け継がれ、個々の領主は、先祖代々の荘園を継承するために存在する偶然の一人物に過ぎない。そして、悲しみとか喜びとかいった、個人としての領主は、この永遠の時間の前では消え去り、ただ、彼らはその畑、森、家畜などを家名に代って代表し、多くの義務を負い、すべては荘園に対する責任という形であられる。

また、この誇るべき荘園を守り、課せられた多くの義務を果してゆくための後継者をつくるために、女性は尊敬され、彼女たちは、高貴な酒や、立派な狩猟などと同じように、領主たちの生活の象徴となっているのである。

この自然は、また、人間生活とも呼応し、領主やその甥の心の動きと共に変化し、⁽²²⁾ 空には雲がかかったり、雷鳴が起ったりして、反響し合うのである。

○ Adam

前述のように、Adam は Blixen の創造であり、伝説中には含まれていない人物であるが、彼女の作品では、この Adam が物語の中心人物になっているのである。

9年間、ヨーロッパの各地で生活した後、急に望郷の念にかられた彼は、仕事を休んで、幼年時代の天国である、デンマークの生家を訪れる。そこで、なつかしい自然に先づ話しかけ、自分の楽しかった幼年時代と再会する。丁度その日、叔父の領主は、一人の母親が、その一人息子の生命を救うため、身代りになって、麦刈りをするのに立合い、その結果を見届けようとしている。こんな叔父の生き方と、その思想に接し、また、実際に、息子のために笑いさえ浮かべて、厳しい仕事に耐えている女の姿を見ることによって、Adam が、はじめに故郷の自然に投げかけた問に対する、自分なりの解答を見つけるに至る過程が描写されてゆくのである。

叔父と出会い、語り合う以前の Adam は、新しい時代——すなわち、封建時代を抜け出た、進歩的な、近代的な思想を持った人間として登場させられる。彼は一人一人の人間の価値を認め、自由の精神を体得した青年で、自分の将来は、家柄や先祖から受けつがれた財産にかかっているのではなく、個人の能力にかかっているといったことにも、すでに確信を持っていた。又、自然、正義、美などに対する自分なりの意見をも持ち得たし、それを強く自覚していた。

云いかえれば、Adam は先づ、個々のものが、その独自の能力に応じて創造し、可能性を十分にそなえているところのものとして、人間を見ようとしていることが明らかになって来る。

こんな Adam が母親からの手紙で、叔父が、自分の息子の死後、息子の許嫁と決めていた女

と再婚したことを知って、急に故郷に帰りたいと思うのである。

De Baand, der bandt ham til dette Sted, var, tænkte han, af mystisk Art. (s. 304)

新しい時代神精の現れとしての、アメリカへ行き、その精神について、もっと知りたいとすら思っていた Adam が、故郷の自然を見て、強く引きつけられたのは、“af mystisk Art”（何か不思議な絆）であったのだが、故郷の莊園を日の出前の一時、散歩していた彼は、幼かった自分と再会する。この描写は実に生き生きとなされ、読者に強い印象を与えるところである。

Han lo ved nu at se alting om sig saa meget mindre, end han huskede det, men dog var han, paa samme Tid, mærkelig bevæget ved Gensynet. Længst døde Mænd og Kvinder kom ham i Møde i Lindealléen, og smilede til ham. En lille Dreng med pibet Krave, der haltede lidt paa det venstre Ben, løb ham forbi med sit Tønde-baand og sin Drage, gav ham i Forbifarten et klart, vaagent Blik og spurgte leende: “Vil du have at jeg skal tro, at du er mig?” Han prøvede at standse Drengen i Flugten og at svare ham: “Ja, jeg forsikrer dig, at jeg er dig,” men den lette Skikkelse ventede ikke paa Svar. (s. 300)

（今、自分のまわりのものすべてが、記憶に残っているよりは、ずっと小さく見えるので彼は笑った。とはいえ、同時に、再会は不思議にも彼を感動させた。ずっと前に死んでしまった男や女たちが、しなの木の並木道にやって来て、彼に笑いかけた。左脚がちょっとびっこで、ギザギザのひだ衿の服を着た小さな男の子が、糸のついた凧を持って通り過ぎ、ぱっちりした眼を彼に向けて、にこにこしながら、“君が僕だって言いたいんでしょ。”と尋ねた。Adam はその小さな男の子が逃げるのを捕えて、返事をしようとした。“そう、僕は君なんだよ、！”と。しかし、その軽やかな影は返事を待たずに行ってしまった。）

望郷の念にかられた Adam は、自分の幼年時代と、このように再会するが、はたして、人間にとって過去とは何であるのだろうか。軽やかな影が、返事を待たずに行ってしまったように、読者には、我々人間が古くから持ち、自問しているこの命題は、しばらくの間、Adam の中に保留され、最後になって返答を得るわけである。

Adam は又、大地に問いかけてみる。“お前は私の体だけが欲しいのだろう。………名前がもっている力と徳が過去にだけ属していないということを世に認めさせれば、お前は私に満足するんじゃないかね。”(s. 305) と彼は問いかける。しかし、大地は Adam に即答は与えないのである。

人間は死ねば、その体はそれを生み出したところの大地へ帰って行くものなのであるが、はたして、その身体に宿る精神もまた、その来た元の場所へ帰るべくあるのか、それとも直線的にどこか他のところへ向って、ひたすら進行して行くものなのだろうか。

過去の自己への問いかけと同じく、この大地への問いかけも、彼の内部にずっと留り続けているのである。当初にあっては、Adam は勿論、精神までも大地にもどるという気は毛頭ないのであるが、ともかく、作者、Karen Blixen は、ここで Adam を通じて、さらに、我々人間がつねに問いつづけて来た、又、問いつづけるであろう問題を新たな形で提出している。それは、我々は一体どこから来て、どこに行くのだろうかという、古くて新しい問題である。

○ 叔父

一方、Adam の叔父の方は、人間の限界、その死などといった、人間の持つ必然性や、存在論的な条件を前提として、人間を見ているのであり、人間の可能性を前提としている Adam とは対立的に登場して来るのである。Blixen は、叔父を保守的な封建領主、Adam を進歩的な青年としての役割を与えながら、同時に人間の持つ普遍的な二面性——すなわち、生に向う存在としての人間、死に向う存在としてのそれという二つの認識を提示し、この永遠の対立矛盾を再び取り上げ、二つの人間のとらえ方を、叔父と Adam に代表させつつ、展開させて行くのである。

領主である叔父は、家庭的には恵れない男であった。その妻は若くして世を去り、子供二人も幼いうちになくなった。ただ一人残された相続人である息子も病身であり、長年の叔父の気づかいもむなしく、20才にとどかないうちに先立ってしまった。叔父自身の宮仕えの方もうまく行かず、宮廷で育った美しい婦人を息子の許嫁にと決めたものの、その息子が死んだ今、彼女と再婚し、ひたすら相続人の誕生を待っているのである。

○ 出会い

叔父は Adam の帰郷を快く迎えてくれた。Adam の簡単な服装にひきかえ、叔父はいまだ古風ないでたちで、Adam が幼い時に見たのと変りなく、威厳と崇高さをそなえており、すべてはもとのままだった。そして、あたかも神の儀式係長のようなだと Adam は考えた。しかも、Adam が、故郷の自然の美しさを賞讃して、今しがた造られたエデンの園のようだといえば、叔父は、²³“私のアダムよ、お前は園のどの木からでも思うままに食べて良い” (s. 306) と答えている。

ここ迄来ると読者は、Adam にとっての叔父、領主は、聖書の中でのアダムにとっての神のようなものであり、Adam と叔父が、アダムと神との関係とアナロジーをなしていることに気づくのであり、作者 Blixen が、青年の名前を Adam とし、叔父は最後まで名前を与えられていない意図が、かいま見られるのである。

以下、Adam と叔父は、それぞれの立場から、種々の事柄について、彼らの物の見方や意見を展開して行くのである。

Adam は最近発行された、デンマークの詩人⁽²¹⁾Johannes Ewald (1743—81) の雄大な⁽²²⁾詩が、他の国の如何なる文学作品よりも、気に入ったといい、北欧の神々の方が、ギリシャ、ローマの神々よりも、道徳的に優れているとの意見を述べる。彼は、北欧の神々は、崇高な人間の徳をそなえている、正義と信頼性と慈悲心があり、野蛮な時代にあつてすら、騎士道精神を持っていたのだというが、叔父は、北欧の神々は、そのような徳をそなえやすいのであり、それは、彼等が全能でない証拠だという。北欧の神々は南欧の神々とちがって、何時も巨人と戦わなければならなかったから、全能ではあり得なかったのである。Adam のいう、騎士道精神も、相手があるから発揮できるものなのであつて、いつも相手を必要とする相対的な存在である。この騎士道自身が、危険と不道德と暗黒を条件としているのだが、全能の神々は、自分の治める世界をありのまま受入れるから、やはり、ギリシャやローマの神々を、叔父は、北欧の神々より上位におくのだという興味ある討論が二人の間になされる。(s. 307~308)

叔父の意見では、人間味のある、感情面を多分に持つところの神は、あくまで神としては劣っているというのであり、神は全能であるのが最高の神であり、非個人的であり、非人間的であるのを是としているのである。

ここにも Adam と叔父の思想の明確な相異が認められる。すなわち、Blixen によれば北欧の神々は人間的かつ相対的であり、南欧のそれらは非人間的で全能である。この神話の神々に対する意見の相異は、これから起る出来事に対する Adam と叔父の相異ともなってくるのである。

Adam は叔父が、普通でない表情で麦畑を見ているのを不審に思い、何があるのかと尋ねたところ、麦刈りが今日始まることを知らされ、さらに Ane Marie という一人の女の話聞かされる。その話というのは (s. 310—312) :

或る少年が放火罪に問われるが、彼の母親、Ane Marie は息子の無罪を主張し、領主である叔父に、息子を放免してもらうように申し出る。叔父は彼女に一つの条件を出す。日の出から、日没までに、ライ麦の畑を刈り取ることが出来れば息子は自由の身にしてやるというのである。普通ならば、三人の男が丸一日かかるころの仕事なのだが、母親はよろこんで、この条件を受け入れ、その仕事にかかる日なのである。

Adam は叔父に、少年が有罪か無罪かを尋ね、叔父は、証言がくい違ふのでどちらとも言えないと答えるが、ともかく、それを決定する立場にいるのが叔父だけなのである。

叔父は一日中畑の見えるところで、事の成り行きと、その結果を見守るために留まり、Adam は一応叔父の元を去って、午前中は、宮中から来たという若い叔母と一緒に過すが、午後になっ

てまた叔父のところへ戻って来る。彼は、今朝叔父から聞かされた、残酷な話で気が重く、じつと朝から一つの場所に残っている叔父の姿が、鎌を持って、息子の生命を救おうと精出して麦刈りをしている女の姿よりも一そう強烈に、彼にずっとつきまとっていた。そして、Adam は、叔父が自分にとって、一体、どんな意味があったのか考える。

Lige fra den Tid, da hans Fader døde, og han selv var Barn, havde den gamle Herre for ham personificeret Lov og Orden her i Verden, Livsvisdom og venlig, beskyttende Vejledning. (s. 321)

叔父は彼にとって、人間の姿を取ったこの世の法であり、秩序であった。そして又、人生についての叡智であり、親切に守護してくれる導きであった。しかし、Adam は、この叔父と敵対関係に入るようなことがあればどうすれば良いのだろうと自問する。(s. 321)

言いかえれば、叔父は Adam にとって、絶対であり、この世の法と秩序の権化であった。しかし、又、Adam にいわせれば、叔父は残酷で、無慈悲であり、畑で働いているあわれな女に同情したり、恵みを垂れて許すようなことはしない人間である。そこで Adam はこの叔父の態度に耐えられず、心をくだくのであり、叔父が一人の人間の運命を意のままにして、超人間的に振舞っていることに恐れをいだき、そのような叔父にふりかかる運命の復讐を恐れるのである。遅くならないうちに、この叔父に大声をあげて、忠告しなければならないと感ずるのだが、叔父のそばへ行くと、思いは言葉にならず、かわいそうな女の仕事がはかどっているかどうか尋ねるだけになってしまう。彼女は多分、やりとげるだろと叔父は言って、朝、Adam から借りた本を取り出す。ここで、再び、Ewald の作品をめぐる二人の論争が交される。

叔父は言う。

“En ny Tidsalder,” fortsatte han, “har skabt sig en Gud i sit eget Billede, en følelsesfuld, en menneskekærlig Gud. Og nu skriver I allerede Tragedier om Eders Gud.” (s. 323)

（“新時代は自分たちの姿にまねて神を創り出したよ、感情的で、人間に情愛の深い神をね。そして、すでに、今、⁽³⁶⁾ おまえたちの神の悲劇を書いているんだね。”）

Adam は叔父に、“我々の人生で悲劇というのは多分崇高で、神聖なものですね”というが、叔父はそれには完全に同意せず、崇高ではあるが、神聖ではないと答える。悲劇はこの地上に於てのみ存在し、悲劇は人間の持ちうる最高の特権であるという。キリスト教の神にあっては、悲劇を経験するために、神は人の形をとったが、あの悲劇は、キリストが、はじめから人間であられたようには悲劇としての効を奏していないのだ。むしろ、悲劇はあの時、キリストを罰した人たちの側にあるのだ。悲劇は、人間のために用意され、人間は、その条件とか本性の中に閉じ込められて、苛酷な必然性のもとに生きているのだ。だから、人間にとっては、悲劇こそがこれらの条件からの救済であり、超越、すなわち神格化なのである。Adam は、この叔父の説明をきいて、叔父とのへだたりを初めて感じる。雲が出て、辺りが薄暗くなり、叔父は雨が降って、

Ane Marie の仕事に支障を来たさないと心配する。

女の麦刈りの仕事は進んでいるとの報告があり、叔父は畑に下り立って行き、Adam も叔父について行った。女は一心ふらんに仕事を続けているが、その細く、日に焼けた顔には少しの恐れも苦痛も見えないばかりか、彼女はすっかり満ち足りた表情ではほえみすら浮かべているようであった。

しかし、Adam は、その様子をみて、たまらなくなり、フランス語で、もうむちゃなことをさせないように叔父に頼むのだが、叔父は、自分が強制させたわけではなく、彼女がよるこんで引き受けたのだと云う。(s. 330)

たしかに Ane Marie は叔父の条件を受入れて仕事にかかったのであり、Adam の思っているように、叔父が無理強いをして、彼女を働かせているわけではない。彼女は、自分に与えられた条件を遂行したいために、一生懸命なのであり、叔父は、誰にも彼女に手助けをしないように言い渡し、それが実行されているかどうかを見守っているのである。この条件を満たすことは、Ane Marie にとっては大きなよろこびであるにちがいない。なぜなら、彼女は自分の愛する一人息子を自由な身にするために麦刈りをしているのであるから。

ここでつけ加えておかなければならないことは、Adam の心の中には、もう一つのエレメントが同時に働きかけているということである。それというのは、Adam は午前中、叔母と一緒にいた時、美しいフランスのアリアを聞いて、自分でも歌ったが、これはパリーで、すでに彼が聞いてよく知っていたものであったが、この叔母のように美しく歌われたのは聞いたことがなかった。この歌の意味するところを、今まさに、Ane Marie によって、実行されているのであるが、Adam が叔父を、ひどい仕打ちだと責めている時には、全くこのことを意識していないのである。

“Mourir pour ce qu'on aime

C'est un trop doux effort!”

(愛するもののために死ぬことは、言葉で云い表せない程喜ばしいつとめなのだ。)

このメロディーが、何度となく Adam の心の中にもどって来るのであり、無意識の中に Adam はこの歌に魅せられ、叔母に心を引かれて行くのであるが、読者には、叔父は Ane Marie のように、自分の一人息子のために、死ぬことが出来なかったのだという不幸が感じられるのである。

話を元にもどすが、Adam は叔父に、女に仕事をやめさせるようにせよと頼むが、叔父は答えて、今、我々二人が立っているところで、Ane Marie に言葉を与え約束したのだと云う。しかし、Adam は、言葉よりも個人の命の方が大切だと云うが、叔父は、“始めに言葉あり”の聖句を引いて、言葉はこの世界の原理であり、引力のようなものだと云う。叔父によれば、彼の言

言葉はこの土地の原理であり、彼の父の言葉も又、そうであったのである。(s. 331) 叔父は、生命よりも言葉の方を先行させる立場を取るのである。

言葉に対する Adam の見解は叔父とは異なる。彼にとっての言葉とは、その中に情緒、勇気、想像を表現する創造の原理であり、そのような言葉というもので世界が出来ているとみている。だから、この言葉が表現するところの力は、人を制限し、規制する法則よりも偉大であるとする。

この二人の言葉 'ord' の解釈は相異なることは明かであるが、それにしても、実際は言葉のもつ二つの面ではないだろうか。言葉は叔父のいう '原理' でもあり、それは久しく人びとに信じられていた、古典的な意味であり、一方、Adam のいう、中なるものの表現としてとらえられるものは、又、一つの面であるが、人間の持つ '言葉' とは、この両面を具えているといえるのである。二人の ord についての対立、意見の相異はただ片方が正しくもう片方が間違っているといったものではなくて、後に、Adam が、すべてのものを統合した見方へと落ち着くが、叔父をも統合した物の見方に到達する時、この言葉の二面性も又、止揚されるものであろう。

Adam が叔父に、言葉を取り消すようにと歎願するが、(s. 331) もしそのようなことをすれば、叔父が Ane Marie に与えた言葉、約束は一体どうなるのか。彼女に、規準がなくなるということとは、丁度、“引力のなくなった後の惑星が宇宙をやたりにかけ廻るように、彼女は、とてもみにくい喜劇役者になる”(s. 333—334) というのである。そうすれば、Ane Marie は、すっかり領主、一価値規準を生み出す者に対する尊敬と信頼を失ってしまい、自らの行為の価値をも見失ってしまうことになるのである。そして、叔父は、自分のこの考えは、彼女にはわかってもらえると続けるのである。

ここに至って、今迄続いていた叔父と Adam の対立は決定的なものとなり、Adam は一刻も速く叔父の元を立ち去ろうと決心し、夕方に馬車を用意してくれるよう依頼する。

ここで Adam は、幼年時代の天国とも永久に別れなければならないと感ずるのである。そんな Adam に叔父は行先を尋ね、Adam は新天地、アメリカへ行こうとしていることを告げる。

叔父は Adam への最後の言葉として次のようにいうが、それはもはや Adam に向けられたものではなく、むしろ、人の立ち去るのを見送り、自分が留る者として、自分自身に云い聞かせる独人言のように話されたのである。

Javist, hvis din Hu staar til Amerika, saa rejs derover, Nevø. Og maatte du da blive lykkelig i den nye Verden.”.....

“Og tag da Tjeneste der,” sagde han, “hos den Magt, som vil give dig et bedre Vilkaar end dette: at du med dit eget Liv kan købe din Søns.”

(“行きたければアメリカへ行って幸福になるがよい。………… お前の生命でおまえの息子の生

命を買うということより、もっといい条件を与えてくれる力のあるところで働くのだなあ。”)
(s. 336)

この別離の最後の瞬間に語られた、叔父の言葉が Adam の心を強く打ち、一種の啓示となるのである。

この時の叔父は、もはや残酷で絶対的な封建領主ではなくなり、一人の息子を失った苦しみに耐えて来た、老いた小さな一人の人間であり、Adam には、叔父を含めた被創造物全体に対する共感が芽生えるが、その時再び叔母の歌うアリアが心によみ返って来る。

愛するもののために死ぬことは、言葉で云い表せない程喜ばしいつとめなのだ。

この同じ瞬間、Adam は人生の道とは何かということを把握することが出来るのである。それはさまざまにもつれた複雑な織物のようなものであり、迷路のようなものである。彼と云えども、死すべきものは誰もこの織物の糸を解きほぐすことは出来ないのだ。生も死も、幸も不幸も、過去も未来も、模様になって織り込まれているのだ。この模様は非常に錯乱しているが、野蛮な人間が意味もないと思う我々のアルファベットを、丁度小学校の子供が意味づけ出来るのと同じように賢人はこれを解くことが出来るのである。意味のないようにみえるものも、又、お互に相反するかのように思われるものにも、秩序と一つの美しい調和があるのだと Adam は考えるに至った。(s. 337—338)

さらに作者 Karen Blixen は云う。生きとし生けるものはみな苦しまなくてはならないのだと。今まで、Adam が厳しく批判した叔父も、若い時には疑いや、多くの涙、そして又、後悔もあったことだろう。それを経て始めて、人生を充分に生きたと云えるのである。麦刈りをしている女も、今は苦痛の中にいるが、それは勝利の凱旋なのである。なぜならば、愛するもののために死ぬことは、人間の条件に対する最高の勝利なのである。

Adam は、今考えてみれば事物の統一、存在現象を結びつける秘密を求め続けて来たのであるが、自分が幼年時代を過したこの土地で、今日、この瞬間にそれらが彼の前に明らかにされたのである。そこで Adam は、運命というものに思いをめぐらし、次のように考えるのである。

丁度、歌のメロディーと声が、道とその目的地が、そして二人の恋人が抱き合って一つになるように、人はその運命と一つなのだ。そればかりではなく、自分を愛するのと同じように、運命を愛さなくてはならないのだと。(s. 338—339)

さらに Blixen は続ける。

宇宙の統一の概念が自分にもたらしたものは何だったのだろうかと考える。一口のはじめにあ

たって、自分がこの土地に属しているという感情から始まって、それがだんだん大きくなり、高められ、偉大なものとなった。いつか将来、原因結果の法則を学びとることは、すばらしく魅力あることだろうが、今はこのことはすぐに出来ることではない。今日は運命と人生の意志に従うのだという感情の高まりだけでいいのである。(s. 339)

そこで、Adam はアメリカ行きをやめ、この地に留ることを叔父に告げた折しも、午後の静けさを破って雷がおこり、低い丘に尾を引いて鳴りひびき、ちょうど一つの手が彼をつかまえて、ゆり動かしただけのようであった。日の出前に尋ねた彼の問に対して、大地は今、答えたのであった。その内容が何であったかはわからないし、また、Adam はわかろうともしない。しかし、叔父に、ここに留まることを約束した時、Adam は、世界の崇高な不思議な力に自分をまかせたのである。後は起るべきものが起るのを待つばかりになった。(s. 339)

Ane Marie の事件を見とどけるため、叔父は夕日の傾く麦畑へ下り立って行き、Adam は日の沈む前に、再び畑へもどるといって叔父の元を去り、叔母とその後の時間を過すが、結局は畑にはもどって来なかった。暗にここで、占い師が告げたように、(s. 302) 叔母と Adam の間に一つの生命が生まれ、それがやがて、この荘園の後継ぎとなることをほのめかしているのである。Adam は叔母とアリアを歌いながら、あたかも自分も畑の中で起こっている事柄と、そこにいる人々について行くかの感を持ち、Ane Marie に生きるものの一人として非常な親しみを感じているのである。一方では死が、そして、又一方では生があるのであるが、それらすべてが人間の永遠の姿であり、Ane Marie も Adam も、生きとし生けるものすべてが運命の手の中にあるのであり、また、この運命は、我々をそれぞれ異ったところへと導き、一人ずつがその目的地へとつれて行かれるのである。(s. 340)

Adam についてはこれで終るが、一方 Ane Marie は、息子が泣きながらついて来る中に、麦刈りを続け、多数の人々が見守る中で、日が沈むと同時に最後の株を刈り取るのであるが、
- “お前の息子は自由になったのだ。お前のやったこの仕事は何時までも覚えられるであろう。”
(s. 343) と言い渡す領主の言葉すら聞こえぬかのように、息子の腕の中にくずれ落ちて死んでしまう。

この女の行為を記念して、領主は一つの碑をこの麦畑に建てさせたので、個々の人物が忘れられ、時間の中で消えてしまった後も、その麦畑は Sorg-Agre (悲しみの土地) と呼ばれ、永く残ったのである。

以上、“悲しみの土地”の中を貫く、作者 Blixen の自然観、人生観が明らかになったと思われるが、そこにある作者の被創造物全体への信頼、生きることへの強い意志、永遠に続く時間の中にありながら、自らは限られた時間の中に生を受け、そして死んでゆく人間のその人生を生き抜いてゆく、厳しい態度は、我々一人一人の読者の魂に強く訴えるものを持っている。

この作品が生れるまでには、作者は少くとも半世紀に亙る人生経験を経ているのである。これは、アフリカという大自然の中で過した、特異な17年も含んでいるのであり、作者の中にあった、自然と人間、神、宇宙についての考えも少なからぬ影響を受けたことは容易に推察される。

母国の自然の中にある生家で、再び帰国後の生活を始めた時、自分の若き日を過し、共に生きた家や庭園、スンド海峡の変らぬ姿を前にして、年老いた自分をふり返り、作者はひとりで、作品の中の Adam と同じように、自然と語らい、問いを投げかけ、焦燥に駆られることもあったことだろう。

自分のたどって来た不思議な人生の道程が、一つの目的を持っていたのであり、自分の運命があるがままに受取り、それを愛することが、人間の条件を最も完全に満たしてゆくことだという考えは、結果論的な響きを持ち、これを Adam のような20才過ぎの青年に持たせることは、無理があるようにも思われるが、この運命という言葉は、50年以上を真剣に生き続けて来た一人の女性の言葉として理解さるべきであろう。ともあれ、この作品の中には、彼女の豊かな体験と、それにとまなう世界と人間に対する深い洞察力に加えて、作家としての優れた才能が充分に発揮されており、それらが結晶して一つの芸術作品に高められているのである。

注

(1) *Storyteller*, p. 88 Interview in Rome: 1956年夏

(2) *Titania*, p. 120

(3) *Storyteller*, p. 89

(4) *Gayety of Vision*, p. 192

(5) *Udvalg*, s. 200

(6) *The Life & Destiny*, p. 156

(7) *Titania*, p. 126

(8) 日刊新聞 “Berlingske Tidende,” 8. sept., 1962 (K. Blixen の死亡した翌日)

(9) *Guddommelige Barn*, s. 20

(10) *Udvalg*, s. 200

(11) *Dansk litteratur historie IV*, s. 201

(12) *Mask*, pp. 81—82 大洪水(1634年)のあった南ユトランド半島の西海岸で一人の青年が、Ballumの近くに漂流して来た自分の家のものを引揚げていたところ、泥棒がそれを取ろうとし、二人はあらい、青年はその泥棒を殺してしまった。青年は法廷で死刑を宣告され、母親が土地の伯爵に許しをこら。彼女がもし、日の出から日没までに麦畑を刈り終えたら息子の生命は助けてもらえることになる。母親は四人の男が刈り取る程広い畑で仕事を終えるが、その直後、立ち上るや背中を折って倒れる。彼女は Ballum 墓地にほうむられ、その麦畑は‘悲しみの土地’として今日まで残っている。

- (13) *Udvalg*, s. 205 (南ユトランド伝説選集)
- (14) *Tilskueren*: の中で “Danske Sagaer” (s. 231—40), 1931として,
- (15) *Gayety*, p. 32
- (16) 1931年アフリカでの農場を売り払って帰国
- (17) *Udvalg*, s. 245: “Hartvig Frish, hans personlighed og gerning” i *Fremad*, 1950. af K. Blixen
- (18) *Mask*, p. 82 *Gayety*, p. 32
- (19) text s. 307によれば, Johannes Ewald (1743—81) の悲劇 “Balders Død” (1775)出版のすぐ後と推察される。
- (20) 1760
- (21) *IDUN* 26頁拙稿「カーレン・ブリクセン」
- (22) text s. 320, s. 325, s. 339 など
- (23) 創世紀II 16
- (24) J. Ewald デンマーク最大の叙情詩人といわれ, 後, K. Blixen の生家となった Rungstedlund に, この詩人は1773〜76住んでいた。現在も K. B. の書齋は Ewald の部屋と呼ばれ残っている。その他, Ewald の丘も家の近くにある。K. B. は他の作品中にもこの詩人のことを書いている。
- (25) “Balders Død” をさす。

テキスト

Karen Blixen: *VINTEREVENTYR*, Gyldendal, København, 1966.

参考文献

- Isak Dinesen: *Winter's Tales*, Vintage Books (Random House), New York, 1942.
- Merete Klenow With: *KAREN BLIXEN, Et Udvalg*, Gyldendal, København 1964.
- Torben Brostrøm & Jens Kistrup: *DANSK LITTERATUR HISTORIE I*, (s. 502—509) & IV, (s. 195—210)
Politikens Forlag, København, 1971.
- Mogens Brøndsted & Sven Møller Kristensen: *Danmarks litteratur*, (s. 288—291)
Gyldendal, København, 1966.
- Svend Cedergreen Bech: *DANMARKS HISTORIE IX* (J. Ewald, s. 511—515)
Politikens Forlag, København, 1965.
- Erik M. Christensen: Efterskrift til *Johannes Ewalds Levnet og Meeninger*, (s. 203—218)
Gyldendal, København, 1971. (Gyldendals Bibliotek Bind 3)
- Clara Svendsen: *The Life & Destiny of Isak Dinesen*, (p. 156)
Random House, New York, 1970.
- Robert Langbaum: *The Gayety of Vision*, Chatto & Windus, London, 1964.
- Donnald Hannah: *Isak Dinesen-Karen Blixen The Mask & the Reality*, Putnam & Co., London, 1971.
- Aage Henriksen: Efterskrift til *Den afrikanske Farm*, Gyldendal, København, 1970.
(Gyldendals Bibliotek Bind 35)
- Aage Henriksen: *Det guddommelige barn og andre essays om Karen Blixen*, Gyldendals
Uglebøger, København, 1970.
- Aage Jørgensen (edited by): *Isak Dinesen, Storyteller*, Akademisk Boghandel, Aarhus, 1972.
- Johannes Rosendahl: *KAREN BLIXEN Fire Foredrag*, Gyldendal, København 1957.

Finn Stein Larsen: *Prosaens Mønstre*, (s. 128—142) Berlingske Forlag, København, 1971.
Parmenia Migel: *Titania The Biography of Isak Dinesen*, Random House, New York, 1967.

その他：新聞記事

1962年9月8日

“Træets drømme,” Politikens kronik, af Merete Bonnessen

“Vor geniale digterinde,” Politiken, af Tom Kristensen

“At fuldbyrde sin skæbne,” Berlingske Tidende, af Jens Kistrup Nielsen

“Karen Blixen løvinde og sibylle,” Berlingske Aftenavis, af Henrik Neiiendam

“Man blev fanget og indtaget af den mørke stemmes magt,” Aktuelt, af Frederik Nielsen.

1967年9月9日

“Karen Blixen og sorgen,” Berlingske Tidendes kronik af Frederik Nielsen